2023年12月17日（日）待降節第三主日朝礼拝説教

『その名はインマヌエル』井上隆晶牧師
イザヤ書9章1～6節、マタイ福音書1章18～25節

❶【ヤコブ原福音書のヨセフ】

イエス様の降誕物語はマタイとルカだけが書いています。ルカ福音書には天使ガブリエルによる「マリアへの受胎告知」が書かれていますが、マタイ福音書では「ヨセフへの受胎告知」が書かれています。どうもマタイの福音書ではマリアは脇役で、ヨセフの方が中心にいるようです。それはこの福音書がユダヤ人に向けて書かれているからでしょう。そこで今日は「ヨセフへの受胎告知」の話をします。ヨセフが聖書に登場するのはイエス様の誕生物語と、１２歳の時の神殿もうでの物語だけです。ヨセフがマリアを引き取った経緯については『ヤコブ原福音書（AD200年前後）』に詳しく書かれています。初代教会ではこのヤコブ原福音書は民衆に人気があってよく読まれていたようです。まだ四つの福音書が正典になる前です。少し紹介しましょう。

●祭司はヨセフに「あなたは主の処女を保護する為に彼女を引き取ると言うくじを引いた。」というと、ヨセフは「私には息子たちもあるし、年寄です。彼女は若いのです。私はイスラエルの民から笑い者になるのではありませんか」と答えますが、祭司が「口答えをしてはならない。主を畏れよ」というと、ヨセフはマリアを保護する為に引き取ったと書かれています。

❷【ヨセフの苦悩】

そんなマリアが結婚前に身ごもります。マタイの福音書の方で読んでみましょう。「**母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。**」（18～20節）マリアとヨセフは婚約していましたが、まだ一緒にはなっていませんでした。そんな時、マリアが「**聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。**」とあります。

●ヤコブ原福音書はこう書いています。「マリアはエリサベツのもとで三か月過ごした。彼女のおなかは日毎に大きくなり、マリアは恐れて家に帰り、己をイスラエルの民から隠した。これらの奥儀が起った時、彼女は16歳だった。さて彼女は六か月となった。すると見よ、ヨセフが建築から帰って来て家に入り、彼女が身ごもっているのを見つけた。」この後、ヨセフは「誰が私の家で悪業をし、この処女を汚したのか。私はマリアを守れなかった。」といって激しく泣いたと書かれています。そしてマリアを呼び、「なぜこんなことをしたのか、神を忘れたのか」と聞くと、マリアは激しく泣いて「私は潔白で男の人を知りません。」と答えます。ヨセフが「ではあ

なたの胎のものはどこから出来たのだ」と言うと、マリアは「私の主なる神は生きておられます。私もどうして出来たのか知らないのです。」と答えます。その後こう書かれています。「そこでヨセフは大変恐れ、彼女から離れて、彼女をどうしたらよいか思い巡らしていた。ヨセフは言った。『私が彼女の罪を隠すなら、私は主の律法に反する者とされる。しかしもしかしたら彼女の中にある者は天使によって生じたのではないかと恐れる。イスラエルの民に彼女を示せば、罪のない血を死の判決に引き渡す者になる。それで彼女をどうしたらいいのか。こっそり彼女を離縁しよう。』」

これは分かりやすいです。初代教会で人気があったわけです。ヨセフは正しい人でした。律法を守る、神を信じる人だったということです。ここでも「罪を隠せば、主の律法に違反する者になる。しかし、もしマリアの言うことが本当なら、彼女を民の前に引き出すことは罪のない者を殺すことになる。」この二つの思いで板挟みになり彼は悩みました。悩んだあげく彼が出した答えは「**表ざたにしないで、ひそかに縁を切る**」というものでした。**これが彼が決めた妥協案でした。善人らしい優しさがある答えの様に感じますが、そこには確信がありません。所詮人間の「正しさ」は行き詰るのです。「確信に基づいていないことは、すべて罪なのです。**」（ローマ 14：23）

❸【神の言葉が私たちに確信を与えてくれる】

離縁の決心をしたヨセフに、その夜、天使が夢に現れてこう言いました。「**ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。**」（20～21 節）

●ヤコブ原福音書ではこうなっています。「主の使いが夢の中で彼に現れて言った。『この乙女を恐れてはならない。彼女に宿っている者は聖霊によるのです。彼女は男の子を産むだろう。そうしたらその名をイエスと名付けなさい。彼はおのが民を罪から救うだろう。』そこでヨセフは夢からさめて、彼にこのような恩恵を与えたもうたイスラエルの神を賛美し、彼女を守護した。」

そこでヨーロッパではヨセフの事を子供の守護聖人として敬うようになったのです。ヨセフは「神の言葉」にかけたのです。別の言い方をすれば、**ヨセフは神の言葉によって、自分の決心をひっくり返し、確信をもって前に向かって歩き始めたということなのです。**人間はそれぞれ「自分が正しい」と思う考えで行動します。でもそこに神が入っているでしょうか。そこにあるのは「私」「私の思い」だけです。「それは神の御心ですか？主は、あなたにそれをせよと言われたのですか？」と聞くと、答えが返って来ません。神に聞いていないからです。**神を入れなければなりません。神の言葉が入ったヨセフには、喜びと賛美があります。神から来たものには確信と喜びと平和がありますが、人から出たものには不安といらだちしかありません。**

❹【神はわれわれと共におられる】

マタイはこの出来事が、「**見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる**。」（イザヤ 7：14）というイザヤの預言がイエス様によって実現したのだと解釈しました。その昔、アラム・北イスラエル同盟軍が攻めてきてエルサレムの町を包囲した時、ユダの国のアハズ王に預言者イザヤはこう伝えました。「神が必ずエルサレムを守るから安心していなさい。不安なら何かしるしを求めなさい。」しかしアハズはこんな状況なのに神など信じられるかといってしるしを求めませんでした。そんな不信仰なアハズに対し、神は一方的にしるしを与えました。それが「**おとめが身ごもって男の子を産む**」というものでした。同じようにマリアが身ごもってイエス様を産むことが、神がこの世界を救うことのしるしだとマタイは言うのです。人間が神を信じなくても、神は一方的にイエス様をこの世に送って、この世を救うというのです。イエス様の誕生はそのしるしなのです。このインマヌエルというのは「**神はわれわれと共におられる**」という意味です。あなたが信じようと、信じまいと神はあなたと共にいるのです。あなたを愛し、あなたに救いを与えます。

●大阪 YWCA の聖書を学ぶ会に一人の高齢の方が学びに来られています。その方は仏教徒で、大変感性の豊かな方で、すばらしい詩を書かれるのですが、先日私に「どうしても分からないことがある」といいます。私はその方にいいました。「仏教は人の最高の業です。この世を観察し、悟ってゆく人間の力です。お釈迦様は神ではないでしょ。仏とは覚者であって、悟りを開いた人でしょ。だから下から上への運動です。しかしキリスト教は上から下への運動です。神が天から地に降り、人に語りかけ、人を呼ばれるのです。だから救いとは一方的に神の業なんです。私たちは自分がどうであるかを注目するのではなく、神は私をどう見ておられるかに注目します。自分の正しさにはもう興味がないのです。神キリストの愛だけに興味があるのです。だからこの方の言葉を聞くのです。」

榎本保郎牧師がこんなことを書いています。「私たちは神が必要であるから神を信じるのではない。むしろ、神が私のような者をも必要としていてくださるのだから神を信じるのである。神が私のためにどんなに大きな事をしてくださったかを知った時、私たちの神信仰が始まったのである。」エフェソ 5：28 に「**わが身を憎んだ者は一人もおらず**」という言葉があります。私たちはキリストにとって、自分の身体なのです。キリストに自分自身として愛されるなんて、何という喜びでしょう。

「病の床にて死を待つ娘よ、なにゆえ望みに輝きほほえむ、語りつげよ、イエスはわれのすべてなれば、イエスはわれのすべてなれば」という讃美歌があるそうです。死を待つのになぜ輝きほほえむのでしょう。それはキリストの愛が分かっているからです。主イエス・キリストにある神の愛に満たされる時、私たちはどんな時もにもなお望みに輝いて生きることができるのです。